

まきどき・植えどき・収穫どき
どきどき情報

5月

●野菜の作業

気象変化の激しい時期です。保温・換気・かん水に気を配りましょう！。

種まき・植え付け	栽培管理のポイント
<p>播種</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ホウレンソウ ・コマツナ ・チンゲンサイ ・ダイコン ・カブ ・ニンジン ・モロヘイヤ ・スイートコーン ・えだまめなど <p>植え付け</p> <ul style="list-style-type: none"> ・トマト、ナス、ピーマン、キュウリ、スイカ、オクラ、ズッキーニなどの果菜類 ・ネギ、ハクサイ、キャベツ、パセリ、セルリー、ブロッコリー、サトイモ、ナガイモ、サツマイモなど 	<p>【野菜苗の定植方法】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・定植時の天候等は、苗の活着や初期成育に影響しますので、薄曇りで比較的暖かく、風のない日を選びましょう。 また、春先は夕方急に寒くなることがありますので午前中に植え、夏などの高温期は逆に夕方の涼しくなってから植え付けるようにしましょう。 なお、春先でも日中高温になる場合がありますので、植え付けの時間帯には注意しましょう。 ・5月末頃までに植え付けるトマト、キュウリなどの果菜類では、ポリマルチの生育効果が高いので、畦たてを早めに済ませておき、ひと雨降ってからなど土壌が適度に湿ってからマルチをかけ利用しましょう。マルチは、地温を高めるほか雑草防止、乾燥防止効果等もあるので便利です。 <p>【保温資材や防霜資材等の利用】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・トンネル被覆 <ul style="list-style-type: none"> 春先の温度の低い時期に効果があり、10～15日くらいの早植え、早まきが可能です。うねの幅に合わせて支柱を立て被覆資材はポリフィルムを使用し、中央部で重なるように2枚がけとすると換気作業がしやすくなります。 特に、高温時はこまめな換気が重要となります。 ・テント(ドーム)及びプラスチックキャップ <ul style="list-style-type: none"> 果菜類等の定植又は播種時に十文字に支柱を立てポリフィルムで覆い周囲を土で押えます。(市販のプラスチックキャップでも良い。) 生育が進んだら頂部を切り取って換気します。 テント栽培の代わりに肥料の空袋を利用している事例もあります。(ミニ情報コーナー「日本農業新聞」記事も参照ください。) ・寒冷紗 <ul style="list-style-type: none"> 寒冷紗は通気性があり光も適度に通すので霜よけほか、真夏の日よけ、アブラムシよけなどにも使えます。 ・べたがけ資材 <ul style="list-style-type: none"> 畑一面あるいは作物に直接かける方法(べたがけ)で資材は軽くて扱いやすい不織布が使われ、直接かけるほかトンネルがけでも使えます。

●水田の作業

【水田除草剤の種類と使用のポイント】

近年、水田除草剤は1キロ粒剤に加えて、投げ込み剤(ジャンボ剤)、フロアブル剤など多くの省力散布剤が開発されています。

そのため、それぞれの散布方法が多様化していますので薬剤の「使用方法」を参照のうえ対象雑草や使用時期、散布方法等を十分把握し効率よく使用しましょう。

*** 粒 剤**

1キロ粒剤等で散布時は田面が露出しないよう3～5cm程度に湛水し、本田内に動力散布機や手回し散粒機などを使い全面散布するものがあります。

*** フロアブル剤**

散布時は5cm程度の湛水状態とし原液を畦畔などを歩行しながら容器から直接手振り散布する。なお、大きな水田で短辺が30mを超える圃場では中央に1条入っての散布が必要となります。

また、水深が浅い場合や藻類が多発している場合などは薬剤の拡散が妨げられることがあるので注意を要します。

*** 投げ込み剤 (ジャンボ剤)**

水溶性のフィルムで包装された剤で散布時は5cm程度の湛水とし圃場の周囲から水田内に投げ入れられます。フロアブル剤同様短辺が30mを超える圃場では中央に1条入っての散布が必要となります。

●ミニ情報コーナー

～ちょっと使えるかも！～

【その1】

保温資材のコーナーでも触れましたが、春先は温度変化が激しく、せっかく定植した果菜類等の苗が低温や強風で生育が遅れたり、傷ついたりしてしまいますが、そんな場合に備えて空いた肥料袋などで保護している光景をよく目にしますが、皆さんはどのようにしていますか？

こんな中、右のような記事がありましたので紹介します。

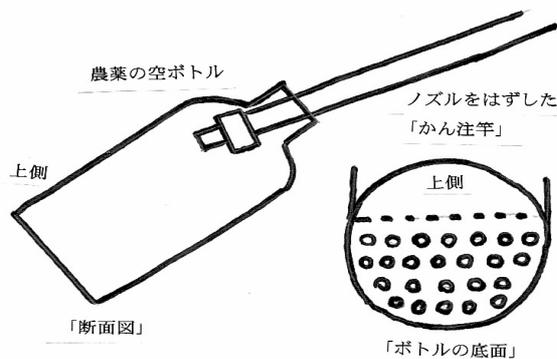
これは、温室などで使う暖房機のポリダクトを利用したもので、費用はかかりますが肥料袋に比べ光の透過性が良いので苗が徒長しにくく生育が安定するようです。

(伊藤組合長：談)

「まとめて作れば経費も安く出来そうなので直売所でも考えてみようか。」とのこと。

【その2】

廃物を利用した散水器具 (ノズル) はいかがですか。



(250mlの大きさがかん注竿の先とちょうど合い使いやすいとのこと。)

***作り方** 作り方はいたって簡単で、ボトルの底の下に向ける側から3分の2くらいの部分に適度な大きさの穴を開け、ノズルの先をはずしたかん注竿を差し込むだけです。底の穴を開けない部分に水流が一旦当たって水の勢いが弱まってやさしくかん水できるとのことです。また、ボトルの口の大きさがちょうどよく、差し込むだけですぐ取り付け、取り外しができ便利とのこと。

●農業機械の整備点検は大丈夫ですか

5月は、春の農作業安全月間です。十分に注意をして欲しいと思いますが、その前に日々使う管理機、草刈機、動力噴霧機などの機械の点検はされましたか。まだという方は、ベルトの亀裂、チェーンの緩み、オイルの交換・補充、グリスの補充など、安全と効率的な作業のため是非行ってみてください。



細い竹を支柱に行灯形に苗を囲っていく (徳島県美馬市協町で)

「よくしませ、徳島県美馬市農業支援センターが考案した、ポリダクトを利用した行灯 (あんどん) 栽培が、ナスやピーマンの生産農家に普及している。定植後の強風や低温から苗を守り、初期収量アップにつながる技術として注目されている。県西部の夏秋ナス産地では、ナスの定植後に強風や低温で葉が傷み、活着や初期生育が遅れ、初期収量の低下が問題となっていた。行灯栽培は、同センターの関口辰也普及指導員が考案した方法で、「ポリ行灯」と名付けた。材料は加温機の送風用に使ったポリダクト。幅80cmの2、3本の竹を四隅の支柱にし、切断したポリダクトを苗を囲むようにかさねていく。直径は1枚20cm程度で済む計算だ。関口普及指導員は「肥料袋に比べて光を通すので、徒長の心配がない」という。昨年、現地実証試験を行ったところ、ポリ行灯で風による葉の傷みが減ったほか、生育促進効果ははっきり認められたという。

平成20年4月27日版
「日本農業新聞」抜粋記事

定植したばかりはかん水作業が重要な作業となります。

しかし、皆さんも工夫していると思いますが、定植したばかりは、土も落ち着かず根も張っていないため、水の勢いが強すぎると土が流れたり、苗が倒れたりしてしまいます。

このため、左の図のような器具 (ノズル) で動噴を使ったかん水を行い重宝しているとの情報を伊藤組合長からいただきましたので紹介します。

***用意するもの** 250mlの農薬の空きボトル (プラスチック製)